

特集展示

新発見！蕪村の

奥の細道図巻



令和4年

6月14日(火)～7月18日(月)・祝

京都国立博物館

平成知新館(1F-2)

松尾芭蕉を深く敬愛していた
与謝蕪村(一七一六～八三)は、
芭蕉の俳諧紀行『おくのほそ道』
を主題とした作品を数多く制作
しています。なかでも、『おくのほそ道』の全文を書写し、
関連する絵を添えた作品は、これまで四件の現存が知ら
れていましたが、このたび新たに五件目となる作品が発
見されました。



この作品は、史料のみから知られるものも含め、諸本
中もつとも早い時期に制作された作品であり、それらの
起点となる重要作と位置付けられます。奇しくも、『おく
のほそ道』が刊行されてから三三〇年となる節目の年に発
見された蕪村の図巻を、関連する当館所蔵品とともに初
公開いたします。

1 与謝蕪村筆 奥の細道図巻

紙本着色 一巻
縦二八・五 長一八二・五
江戸時代 安永六年(二七七七)

このたび新たに発見された作品。史料のみから知られるものも含めると、蕪村は約十件にのぼる奥の細道図巻を制作しているが、本作はそれらのなかでもつとも早く、諸本の起点として位置付けられる重要作である。

発注者は、京都の俳人佐々木有則。有則に宛てた本作の送り状では、女武者(佐藤継信・忠信兄弟の喜婦)の絵が本作の「模様」(見どころ)だと記し、自分でも一巻欲しいくらいと述べている。箱書きから、京都の俳人蒲井有国が一時所持していたことがわかる点も興味深い。江戸時代後期に了川という人物が写した模本(稀衛文庫蔵)の存在が知られていたが、原本が出現したことの意義はさわめて大きい。



2 重要文化財

与謝蕪村筆 奥の細道図巻

紙本着色 二巻のうち下巻
縦三一・〇 長七一・〇
江戸時代 安永七年(二七七八)
京都国立博物館蔵

新出本の翌年に制作された。一巻だった員数は二巻となり、添えられた絵は九場面から十四場面に増えているほか、各場面の表現も少しく異なる。文字の書き振りは、やや硬い印象の新出本に比べ、かなりのびのびとしている。

奥書に注文者の名はないが、安永七年十月二十一日付の晧台・土朗(いずれも名古屋の俳人)宛書簡のなかで、「おくの細道之巻」を近日中に送ること、また「財主(金持ち)の「風流家」の手許にあつてほしいという希望を述べて、高値での買取について斡旋を依頼している。晧台は十二月十六日付で画巻を絶賛する内容の書簡を送っており、その間にあたる十一月完成の本作がこれに該当する可能性が高い。



3 横井金谷筆

蕪村筆奥の細道図巻模本

紙本着色 一巻
縦二八・八 長一六〇・八
江戸時代 十九世紀
岡村健守氏寄贈
京都国立博物館蔵

蕪村の画風を学んだ浄土宗の僧、横井金谷(一七六一～一八三三)が、京博本(2)を一巻にまとめて写した作品。基本的には原本に忠実な模本だが、細部に拘泥しない簡略な筆致と、強い調子の墨の使用などに独自の表現を見せる。

落款に「発行者」とあることから、三宝院門跡高演法親王の大峯入りに発役(発をもち、門跡を先導する役)として供奉された文化元年(一八〇四)以降の作と考えられる。求められての作画と見てよく、蕪村による奥の細道図巻が、いかに人気を博したかをうかがわせる例例である。飛驒の素封家、岡村家に伝来した。



松尾芭蕉の『おくのほそ道』は、元禄二年（一六八九）三月、四十六歳の芭蕉が門人曾良をともない、江戸を出立して奥州北陸を巡り、大垣に入ったのち九月に伊勢参宮へ発つまでを記した俳諧紀行です。草稿に何度も推敲が重ねられた結果、数種の筆写本が伝わるのに加え、平成八年（一九九六）には芭蕉自筆本の現存が確認されています。芭蕉没後の元禄十五年（一七〇二）に版本が刊行され、広く世に普及しました。

芭蕉を深く敬愛していた与謝蕪村（一七一六〜八三）は、日本文学史上屈指の紀行作品とされるこの『おくのほそ道』を主題とする作品を、数多く制作しています。なかでも、その全文を書写し、関連する絵を添えた作品は、これまで四件の現存が知られていました。その四件とは、海の見える杜美術館本・京都国立博物館本・山形美術館本・逸翁美術館本であり、海の見える杜美術館本を除く三作品は、すべて重要文化財に指定されています。

これらの作品は、寛政五年（一七九三）の芭蕉百回忌に向けて蕉風復興（芭蕉の俳風への回帰運動）の機運が高まるなか、芭蕉の事績を顕彰し、その名を永く世に伝えるべく制作されたものです。芭蕉の名文を蕪村独特の書体によって筆写し、蕪村自身が「海内に並ぶ者」はいないと云ってはばからないほどに得意とした俳画（俳諧味のある略筆画）を添えた、まさに詩書画一体ともいべき作品であり、至高の三重奏と言っても過言ではありません。絵として描かれるのは、芭蕉が詠み記した数々の名句や土地の風景ではなく、主に旅先で出会った人々との出会いや交流の様子です。いずれも蕪村の代表作として高い評価を受けており、三件もの作品が重要文化財に指定されていることもそれを物語っています。

そしてこのたび、新たに五件目となる作品が発見されました。蕪村ならではの言いようのない書風、淡く草々としていて、しかも深い詩情と軽みとを兼ね備えた俳画は、間違いなく蕪村その人のものです。なんとみずみずしく、楽しく、そして心に深く染みる表現でしょう。顧客に対する一種の宣伝文句のたぐいでもあったかもしれませんが、一方で蕪村の自信のほどがうかがわれて興味深く思われます。

では、本作よりもあとに制作された諸本は、起点となった本作をそのままコピーしたような作品なのでしょうか。答はノーです。もちろん、本文自体は同じですし（用字の違いなどはあります）、絵も含めて基本的な構成は大きく異なるものではありません。しかし、各作品間にはいくつもの違いを挙げることができます。たとえば、添えられた絵の数は、本作が九場面であるのに対し、海杜本は十三場面、京博本は十四場面、逸翁本は十五場面と、制作年が下がるにつれて徐々に増えています。また、同じ場面でも描く人数やポーズ、構図などが少しずつ異なり、それぞれが独自の表現を有しているのです。文字については、本作は他本と比べ総じて行間がゆったりしており、書き振りにはやや謹直さを感じられるという特徴があります。これなどは、最初の作品であるがゆえの緊張感がもたらす、一種の硬さと理解できるように思われます。

最後に、本作の伝来について、現時点で考えられることを、推測による部分も含めてまとめておきます。本作は、近年まで名古屋に所在していました。制作当初は京都にあったことが確実ですから、いずれかの時期に名古屋へもたらされたようですが、それがいつのことなのか、はつきりしたことは不明です。しかし、作品の移動について、まったく手がかりがないわけではありません。

手がかりのひとつは、先ほども触れた、巻末に据えられた呉春の識語です。そこに見える「謝翁書画不凡尤可寶重也」との言葉は、文字通りの意味としては、蕪村の書画からなる本作は非凡で貴重なものであるという賛辞ですが、実質的には弟子による極めとしての意味をもっていたと考えてよいと思われます。この識語が書かれた寛政八年（一七九六）十月時点では、注文主である佐々木有則は存命中であることが他の史料からわかるので、有則がこの識語を依頼した可能性はきわめ

新出の与謝蕪村筆「奥の細道図巻」について

うか。日々の生活のなかで鬱屈した感情を、擦り減った心を癒し、観る者の精神をも解放してくれるような、そんな力があるように感じられます。

巻末には、この優れた作品を手に入れた、幸運な注文主の名が記されています。その注文主とは、季遊こと佐々木有則、通称を甚三郎といった京都の俳人です。阿波藩の御用達だった桔梗屋の主人で、蕪村とも親交のあった俳人三宅嘯山の門人でした。そして、蕪村の署名に続いて、その門人である呉春が、寛政八年（一七九六）に本作を絶賛する言葉を記しています。

じつは、本作については、蕪村自身が注文主に送った書簡（送り状）、および江戸時代後期につくられた模本（柿衛文庫蔵）から、これがかつて存在していたらしいことはわかっていました。しかし、これまで知られていた四件のうち、海杜本・京博本・山形本が『蕪村遺芳』（一九三二年）に、逸翁本が『侯爵蜂須賀家御藏品入札』（一九三三年）に図版掲載されていたのに対し、本作はそのような近代の写真資料さえも存在せず、まったくの行方不明だったという点に大きな違いがあります。

さらに、本作が重要なのは、史料のみから知られる作品も含めて、諸本中もっとも早い時期に制作されたものであり、それらの起点として位置付けられる点です。現存するのは本作も含めて五件ですが、書簡などの史料からは、蕪村がおよそ十件の奥の細道図巻を制作していたことがわかっています。そのような現在所在不明の、あるいはすでに失われてしまったかもしれない作品を含めて、一番初めに制作された作品である点に、本作の際立った価値があります。

実際、先ほど触れた、蕪村が注文主に送った書簡には、制作にあたって「風流洒落を第一」としたこと、画中に女武者を描いた意図（芭蕉句にちなんだ五月人形ではなく、蕪村自身が見た佐藤継信・忠信兄弟の妻たちの木像を描いたということ）などがこと細かに記され、新作に対する蕪村自身の意気込みがうかがわれる点でたいへん貴重です。書簡の末尾には、この作品は自分でも欲しいくらいだとまで記しています。

低いでしょう。蕪村に本作の制作を依頼したのが、ほかならぬ有則自身である以上、わざわざ極めを求めなくてもなく、作者が蕪村であることはわかりきっているからです。

そこで考えられるのが、この寛政八年の時点で、本作が有則の手を離れた可能性です。作品が、それを発注した人物とは異なる第三者のもとへ移動する際に、作品の真正性を保証するものとして極めが必要とされることは、わかりやすい道理と言えるでしょう。有則は、これと近い寛政年間後半に、円山応挙筆「水月図」（知恩寺蔵）など複数の作品を相次いで手放しており（ただし、それは経済的な理由からではなかったようです）、時期としても違和感はありません。あくまでひとつの可能性ですが、寛政八年に本作が有則のもとから動いたという推測は成り立ちます。呉春が内箱の箱書きをしたのは、識語を記したのと同じタイミングと考えてよいでしょう。

これと関連して気になるのが、安永八年（一七七九）に維駒のために制作された逸翁本の末尾に記される、こちらは明確に極めである呉春の識語（ただし、「おくの細道を覚束なからす書おほせたるは夜半翁をおきてそれたれならむ」、すなわち、かくも見事に奥の細道を描きおおせるのは蕪村以外に誰がどうか、という少し変わった書き振りで）が、本作のそれとまったく同じ寛政八年十月に記されている点です。これは、たんなる偶然でしょうか。ひよっとすると、呉春が両作品を同時期に見ることとなった、何らかの特殊な事情があったのかもしれない。なお、逸翁本には俳人の勝見二柳が、やはり寛政八年に序文を記しています。この序文は、大坂の書家福岡撫山が逸翁本を入手したことを契機として書かれたらしいことが、その内容からわかります（撫山は逸翁本に題字を記しています）。

さて、本作の伝来に関するもうひとつの手がかりは、外箱の箱書きです。調査の結果、外箱の箱書きをしたのは、浦井有国（一七八〇〜一八五八）という京都の俳人であることがわかりました。有国の家業は、刀剣の柄糸商。俳諧を入江斗雪に、和歌を富士谷御杖に学んだ人です。

数多くの短冊を収集して「短冊天狗」と呼ばれ、短冊集『眺望集』『続眺望集』をまとめたことが知られています。呉春が識語を記した寛政八年が、仮に先ほど推定した通り作品の移動時期だったとしても、有国はこのときまだ十七歳ですから、このタイミングで本作を入手したのは有国とは異なる人物ではないかと考えられます。しかし、その後、有国が本作を所蔵していた時期があったことは間違いありません。

有国が本作を所蔵していたことは、柿衛文庫の模本からは知り得ない情報であり、このたびの発見により明らかになった事実です。ここで、きわめて興味深く思われるのは、じつは有国こそが、冒頭で触れた芭蕉自筆本『おくのほそ道』の旧蔵者であったという点です。有国は、寛政版『おくのほそ道』のほか、『俳諧七部集』や『其角七部集』『蕪村七部集』などの俳書の版權を持っていた時期もあり、蕉門の流れを汲む俳人として、本作に関心を寄せたとしても不思議はありません。有国の俳諧の師入江斗雪は、『俳諧家譜後拾遺』に三宅嘯山の門下として佐々木有則とともに名が載る俳人でした。

一方で、有国は文化十二年(一八一五)に京都で書画の展覧会を主催したりもしていました。そこで展示された作品の中には、本作ではないものの、蕪村の絵画も含まれています。おそらく、こうした有国の多彩な活動と、それを支える彼の多方面への関心が、本作を入手する契機になったと考えられます。

ただし、その後の本作の移動については、現時点では手がかりが見当たりません。現存諸本との詳細な比較検討など、多くの課題を今後に残しますが、まずは新発見の喜びを皆様と共有したいと思います。

(ふくし・ゆうや 京都国立博物館主任研究員)

*本稿は、JSPS科研費16K16739の助成を受けたものです。

新発見! 蕪村の「奥の細道図巻」

Picturing Bashō's *Narrow Road to the Deep North*: A Newly Discovered Handscroll by Yosa Buson

〈主要参考文献〉

- ・勝峰晋風編『日本俳書大系第十五巻 俳諧系譜逸話集』日本俳書大系刊行会、一九二七年
- ・恩賜京都博物館編『蕪村遺芳』小林寫眞製版所出版部、一九三二年
- ・中野莊次解説・釈文『眺望集』正・続 臨川書店、一九八五年
- ・大谷篤蔵・藤田真一校注『蕪村書簡集』岩波書店、一九九二年
- ・岡田彰子『蕪村筆蹟の研究』和泉書院、一九九五年
- ・上野洋三『芭蕉自筆「奥の細道」の謎』二見書房、一九九七年
- ・尾形仿ほか編『蕪村全集第六巻 絵画・遺墨』講談社、一九九八年
- ・櫻井武次郎『奥の細道の研究』和泉書院、二〇〇二年
- ・逸翁美術館・柿衛文庫編『没後220年 蕪村』思文閣出版、二〇〇三年
- ・永井一彰『芭蕉』という利権(一)『奈良大学紀要三十一号』二〇〇三年
- ・河野元昭『与謝蕪村筆「奥の細道図巻」』國華、一三四五号、二〇〇七年
- ・尾形仿ほか編『蕪村全集第五巻 書簡』講談社、二〇〇八年
- ・井本農一ほか校訂・訳『日本の古典をよむ』② おくのほそ道 芭蕉・蕪村・一茶名句集』小学館、二〇〇八年

●関連土曜講座 7月9日(土)

新出の与謝蕪村筆

「奥の細道図巻」について

京都国立博物館主任研究員 福士雄也

※平成知新館 講堂にて13時30分~15時に開催。

定員100名、聴講無料(ただし当日の観覧券等が必要)。

※当日10時より、平成知新館1階グランドロビーにて整理券を配布し、定員になり次第配布を終了します。

●展示作品一覧

番号	作品名	筆者	員数	法量	時代	所蔵
1	奥の細道図巻	与謝蕪村筆	一巻	縦二八・五 長一八二・五	江戸時代 安永六年 (一七七七)	京都国立博物館
2	重要文化財 奥の細道図巻	与謝蕪村筆	二巻のうち 下巻	縦三一・〇 長七一・〇	江戸時代 安永七年 (一七七八)	京都国立博物館
3	蕪村筆奥の 細道図巻模本	横井金谷筆	一巻	縦二八・八 長一六二・八	江戸時代 十九世紀	岡村健守氏寄贈・ 京都国立博物館

〔凡例〕本特集展示の企画、本リーフレットの編集・作品解説は、福士雄也(京都国立博物館)が担当した。作品の法量の単位はセンチメートル。

京都国立博物館
KYOTO NATIONAL MUSEUM

京都市東山区茶屋町527
075152512473
(テレホンサービス)
https://www.kyohaku.go.jp/

